

自己感情論の展開

船 津 衛^{*1}

The Development of the Self-Feeling Theories

Mamoru FUNATSU

summary

C. H. Cooley should regard "self" as "self-feeling" and as "looking-glass self" by knowing recognition and evaluation of others through the imagination.

The self research was the self epistemology which didn't think the self with the emotion. In the emotion research, the emotion was the biological emotion to catch a human emotion by biological model. A self-conscious emotion such as pride and shame has been ignored and excluded.

Self-conscious emotion researches tied emotions to the self and explained the occurrence of the secondary emotion in the development, and took a close-up of the cognitive side of the self. Then, self-conscious emotion is produced in interactions with others, and the emotions varied in belonging for the self.

Goffman took up an emotion from the sociality of the emotion, especially the emotion expression and a self-conscious emotion. He cleared that the emotions were constructed consciously by the impression management. The self theory of Cooley has succeeded and extended by Goffman.

Self-emotion theory must explain not only the social formation of the emotion, but also active formation of the emotion in the human reflexive process. An emotion is interpreted, and is raised to new emotion. In the self-feeling theory not only the transformation of the emotion expression, but also of the emotion itself comes to be performed.

key word

self-feeling, self-conscious emotion, self-managing emotion, self-reflexive feeling

要 旨

現代は感情の時代であるともいわれるように、感情が人びとの熱い関心を集めるトピックのひとつになってきている。社会学者のC・H・クーリーは自我を「自己感情」としてとらえ、その「自己感情」が「鏡に映った自我」として他者の認識や評価を想像を通じて知ることによって形作られるものとしている。

自我研究においては、これまで自我を認知的にのみに捉え、感情を扱わない自我認識論であった。また、感情論においては感情と認知とは無関係であるとされ、人間の感情を動物と同じ生物学モデルによって捉える生物学的感情論であった。その結果、誇りや恥などの自己意識的感情は無視され、排除されてきている。

これに対して、自己意識的感情研究は自我と感情を結びつけ、発達における第2次的感情の発生を明らかにし、感情の認知的側面をクローズアップした。そして、自我との関係において、感情が他者の相互作用過程において自己意識的に生み出され、また、自我との関連如何によって、異なる感情が生じることを明らかにした。

社会学者のエ・ゴフマンは感情を正面から問題とし、感情の社会性、とくに感情表現の社会性と自己意識的感情を問題とした。ゴフマンによると、ひとが他者との相互作用において自己を意識すると困惑が生じ、困惑の状況を回避するために感情を意識的にコントロールする印象操作がなされるようになる。ゴフマンの研究はクーリーの自己感情論を継承し、延長、発展させるものとなっている。

このような自己感情論は感情の社会的形成を明らかにするだけでなく、感情の主體的形成をも問題とする必要がある。人間の内省過程において、既存の感情が解釈され、新しい感情が創発されてくる。そのことによって、感情表

^{*1} 放送大学教授 (「社会と経済」専攻)

現の変容のみならず、感情そのものの変容も行われるようになる。

キイ・ワード

自己感情、自己意識的感情、自己操作的感情、自己内省的感情

I. 自己感情論の成立

現代は感情の時代であるともいわれるように、感情が人びとの熱い関心を集めるトピックのひとつになってきている。人間生活において、知的要因のみならず、感情的要因もまた、人間の行為と社会のあり方に大きな影響を与えている。

このような感情については、しかし、これまで社会学や社会心理学ではあまり研究がなされてこなかった。感情は主に生理学や生物学において解明がなされてきており、感情が身体的な自動反応であり、生理学的、生物学的過程であると考えられてきた。そして、従来の社会学、社会心理学は知的経験を重視し、感情を非合理的、無規則的なものとして無視ないし軽視してきていた。

感情が非合理的とされてきたのは、合理性がモノの合理性において考えられてきたからといえる。A・ホックシールドによれば、これまでの科学においては、技術的、合理的文化のプリズムから客観的で測定可能な社会生活の特性に焦点が置かれてきた。その結果、感情はそのフレームワークに合わないものとして無視されてきた (Hochschild, 1979)。

けれども、「情動には情動なりの固有の理性があり」(Evans, 2001, 訳170)、モノの合理性とは異なる感情の合理性も十分ありうる。感情の合理性はひとつひとつの関係の内に存在し、他者との関係で生み出され、展開する社会性を有しており、そこにおいて社会的な合理性が見出されることになる。

人間の感情は他者との関係において社会的に生み出される。社会学者のC・H・クーリーは自我を「自己感情」(self-feeling)としてとらえ、その「自己感情」が「鏡に映った自我」(looking-glass self)として、他者の認識や他者の評価を想像を通じて知ることによって形作られるものとしている (Cooley, 1902)。

そして、他者の認識や評価についての「想像」は他者への「共感」によって行われると考える。人間は他者の感情を自分自身の感情の助けを借りて理解する「共感的イントロスペクション」(sympathetic introspection)によって、他者の認識や評価を知り、それを通じて自己を知るようになり、その過程において自己感情が具体的に形成されることが明らかにされる。このようなクーリーの自己感情論によって社会的感情論は成立したといえる。

しかしまた、クーリー理論においては他者が主観的世界の中に存在し、自己感情は人間の想像の内に位置

を占め、マインドの中にあるものとされている。G・H・ミードによると、クーリーは自己感情をコミュニケーション過程において捉えておらず、自我の社会性を解明できないでいる。自我を自己感情に求めるのでは自我の起源、また自己感情の起源も説明できないことになる。けれども、自我の本質は感情的な現象ではなく、認知的現象であり、自我の起源と基盤は社会的である。したがって、自我は認識のレベルにおいて捉えられるべきである (Mead, 1930, 1934, 173. 訳185)。

しかし、クーリーは必ずしも主観主義者ではない。H・シューベルトによると、クーリーの「想像」は相互主観的コミュニケーションのあり方であり、「自我はその環境との相互作用を通じて形成され、マインドは相互作用過程において確立されていることを認識していた」(Schubert, 1998: 11)のである。また、G・ジェイコブスによれば、クーリーにおいて自己感情は内省的過程を伴った感情を根拠とした自我となっている (Jacobs, 2006: 69)。

そしてまた、人間の自我は認識レベルだけではなく、感情のレベルにおいても存在する。むしろ、自我は認識と感情の両レベルからなっていると見える。実際、人びとにおいて感情は認知と結びついている。好きな人の忠告は耳に入るが、嫌いな人の場合はそうはいかない。M・ルイスによると、感情の発達は認知能力の変化を必要とし、認知能力の変化は感情の発達の変化を促進し、また、それによって促進されるようになる (Lewis, 2007a: 134)。¹⁾

自我研究においては、これまで自我を認知的にのみ捉え、感情を扱わない自我認識論であった。そこでは感情経験に自我過程が含まれることにあまり関心が払われてこなかった。他方、感情論においては、感情と認知とは無関係であるとされ、人間の感情を動物と同じ生物学モデルによって捉える生物学的感情論であった。その結果、そこでは、誇りや恥などの自己意識的感情は無視され、排除されてきている。

人間は他の動物とは異なり、自我を持つことができ、自己を他者の観点から顧みる社会性を有している。そして、人間の感情、とりわけ、悲しみ、喜び、プライド、恨み、嫉妬、恥、罪、困惑などの感情は他者との関係において社会的に生み出されている。愛するひとがそばにいと喜びの感情が生じ、そのひとが長い間不在であると寂しいという感情が生まれる。また、死に伴う悲しみの感情は死者がどのような存在であったかによって大きく異なってくる。そして、困惑は特定の他者と強く結びつき、罪は「一般化された他者」(generalized other)との関連において生じ、恥は他

者がその中間に位置する場合に生まれる (Shott, 1979: 1324)。このように、自己感情は社会性を有している。

もちろん、感情は自我がなくても生じうる。しかし、自我があると異なった行動が生み出される。男性は女性の目の前に現れた熊から逃げ出して、罪や恥の感情を持つよりも、熊と戦い、女性の守護者としての誇りを維持しようとする (Tracy and Robins, 2007b: 189)。自我過程は感情を引き出す出来事と感情アウトプットとを媒介するものとなっている。そして、感情の認知性が理解されれば、認知の社会性から感情の社会性を知ることができるようになり、感情の発生や発達を知ることになる。感情は生理学的、文化的、構造的要因に対する単なる認知的反応ではなく、社会的相互作用過程において生み出されるものである (Denzin, 1983: 42)。

そしてまた、人間が他者の観点から自己を内省することから、自己の感情を内省することが行われるようになる。そこにおいて、自己内省的感情が生み出されるようになり、感情は自己内省的感情として概念化されることになる (Denzin, 1983: 45)。T・ミルズとS・クラインマンによると、人間の合理的行為が自己内省に基づく「非-感情」であるならば、内省がなされない「感情」は自然発生的感情であるが、内省がなされない「非-感情」がルーティン行為であるならば、内省にもとづく「感情」は「自己内省的感情」であることになる (Mills and Kleinman, 1988)。

II. 自己意識的感情研究の展開

ルイスによると、自己意識的感情研究は始まったばかりであるが、これからは感情研究の中心となるものである (Lewis, 2000: 634)。自己意識的感情の主要な特性は、M・R・リーリィによれば、内省的表現と内省的評価であり、自己意識的感情は自己内省を要請する。他者によって自分がどのように認識され、評価されるのかについて内省がなされるようになる。自己内省的感情の唯一のカテゴリーが自己意識的感情であることになる (Leary, 2004: 130)。

ルイスは感情を基礎的感情 (怒り、喜び、恐れ) と自己意識的感情 (恥、困惑、罪) の2つに分ける。前者を第1次的感情、動物的、基礎的、生物学的、普遍的感情として生物学において研究し、後者を第2次的感情、人間的、派生的、心理的、特定の感情として、心理学において研究されるべきと考え、自らは後者の第2次的感情の考察を行っている。

J・P・タングニーらによれば、一方で、感情に対して自我が影響を与え、他方で、自我に対して感情が影響を及ぼし、そこに、自己意識的感情が生まれる (Tangney, Stuewig and Mashek, 2007)。ここから、タングニーらは道徳的感情と自己意識・自己評価を結びつけて考え、自己意識的感情に関する「道徳的感情、道徳的認知、道徳的行動」の概念モデルを提示してい

る。そのモデルは道徳的基準、道徳的感情、道徳的認知、道徳的行動からなっている。道徳的基準には自律、コミュニティ、神性があり、道徳的認知には道徳的推論や犯罪信念がある。そして、道徳的感情には恥、罪、困惑などがあげられている。

また、ルイスによれば、人間の感情は発達するものである。2歳半頃に自己意識が現れ、誇り、恥、罪などの自己意識的感情は3歳に生じるようになる (Lewis, 2007a)。自己意識的感情は行為の基準とルールの認識、基準やルールに関連した、行為、思考、感情の成功や失敗の評価、成功や失敗を自我、とくに自我全体、あるいは特定の行為に帰属することから成っている。ここから、ルイスは「自己意識的、評価的感情の構造的モデル」を提示している (Lewis, 2007b)。

そのモデルによれば、恥や罪は基準に適合することに失敗したことの評価によって生み出され、恥は自我全体の失敗に帰属し、罪は特定行為の失敗に帰属し、困惑は否定を含まないが、自己評価と恥の結果の自己帰属の結合によって生み出されることになる。

そして、トレイシーらによると、自己意識的感情には5つの特性がある (Tracy and Robins, 2007a)。第1に、それは自己認識と自己表現を必要とする。自己意識的感情は認知的だけではなく、関係的、社会的、集会的表現を意味する。第2に、自己意識的感情は基礎的感情よりも後に現れてくるものである。恥、罪、誇りの出現は3歳末以後のことになる。

第3に、自己意識的感情は複雑な社会的目標の達成、つまり、地位の維持や集団排除の阻止を推進する。恥と困惑は社会的違反の後の妥協と回避の行動を促し、罪は社会的不正の後の謝罪と告白を促すようになる。第4に、自己意識的感情は普遍的に認識されるような顔の表情をもっていない。第5に、自己意識的感情は基礎的感情よりも認知的に複雑である。それは安定した自己表現の形成と意識的自己内省の能力をもたなければならない。

このように、トレイシーらは「自我・アイデンティティ」、「目標関連・一致」、「安定・統制可能」、「自我全体・部分」の関連を明らかにしている。つまり、かれらは自己意識的感情の規制を認識過程との関連において解明している。そして、「困惑、罪、誇り、恥を経験するためには、公的、私的自己表現に注意を向け、出来事 (刺激) がアイデンティティ目標と一致しているのかどうかを評価し、また、出来事の原因を内的要因に帰属させること」 (Tracy and Robins, 2007b: 191) が必要となる。

恥は否定的な出来事、アイデンティティ目標関連、アイデンティティ目標との一致、内的、安定的で、統制不可能で自我全体に帰属する。罪は否定的な出来事、アイデンティティ目標関連、アイデンティティ目標との一致、不安定・統制不能で特定行為に帰属する。また、困惑はアイデンティティ目標関連、アイデンティティ目標との不一致、内的帰属の評価、公的、自我、内的、安定、統制不能で、自我全体に帰属することにな

る。

トレイシーらは自己意識的感情の生成過程を明らかにする「自己意識的感情の過程モデル」を提示している(Tracy and Robins, 2007a)。第1に、出来事が生存や再生産に関連している場合は基本的感情が生まれる(「生存—目標関連」)。第2に、自己表現の活性化がない場合は感情は生じない(「自我への注意的焦点づけ」)。第3に、アイデンティティに関する問題か否か(「アイデンティティ—目標との関連」)、第4に、出来事がアイデンティティ：私が何であり、また何になりたいかに関する目標と合致しているのかどうか(「アイデンティティ—目標との一致」)、第5に、出来事は私に関する事柄の故に起こったのか(「位置への帰属」)、第6に、私がいづも行い、統制出来ないことか、また、それはアイデンティティに関する事柄か(「安定性、統制不可能性、全体性への帰属」)が自己意識的感情の生成条件となる。

このように、自己意識的感情研究は、自我と感情を結びつけ、発達における第2次的感情の発生を明らかにし、感情の認知的側面をクローズアップした。そして、自我目標、内的、不安定、統制可能を問題とし、恥、罪、困惑などの感情が他者のかかわりにおいて自己意識的に生み出され、自我全体か行為のみに帰属するかによって異なる感情が生み出されることを明らかにした。これらの自己意識的感情研究は自己感情の社会性、感情の自己意識性を解明するとともに、感情の構造と過程を明らかにしたといえる。

しかし、そこでは、多くの場合、自我イコール認知とされ、自我が認識と感情からなるものと必ずしも考えられていない。つまり、自己意識過程それ自体が正面から問題とされていない。その結果、自我は認識の側面においてのみ取り上げられ、そのレベルにとどまり、自己内省の過程に触れられることがない。したがって、その研究は自己意識的感情というよりは、他者意識的感情の研究となっている(Campos, 2007. xii)。そこでは自己内省的感情が自己感情の主体的変容をもたらすことは問題とされることがなくなっている。

Ⅲ. 自己操作的感情論の展開

社会学者のE・ゴフマンはクーリーの自己感情論の積極的展開を行っている。G・H・ミードやH・G・ブルーマーは内省的知性を重視し、内的世界を問題としたが、かれらは感情を直接には扱わなかった。それに対して、ゴフマンは知性よりも感情を正面から問題とし、感情の社会性、とくに感情表現の社会性と自己意識的感情を問題とした(Scheff, 2006)。ゴフマンの研究はクーリーの自己感情論を継承し、延長、発展させるものとなっている。

ゴフマンは、自我が他者の認識、他者の評価、自己の感情からなるというクーリーの自我の3側面説に加えて、人びとの自己表現、とりわけ、印象操作のあり方を問題としている。印象操作は困惑状況を回避する

ために行われるものであり、感情は自己意識的なものとなる。ゴフマンの感情論は人間の印象操作を中心とする自己意識的感情論となっている。

ゴフマンによると、人間の他者との社会的相互作用は自己表現と他者からの要求の確認から構成されている。そして、人びとのアイデンティティの対立の背後には社会構造のコンフリクトがあり、そこに自己を置くことと自己表現がある状況では適切だが、別の状況では不適切という「役割分離」(role segregation)が生じるようになる。

ゴフマンによれば、「自分のアイデンティティに関して自分が提示したつもりの仮定が目の前の事実によって脆弱なものになるか、否定されるようになる」(Goffman, 1967: 訳109)。そこでは自分が提示する自我が信用されなくなり、自分自身に対して、また相互行為に対して行ったこと、あるいは行ったと見えることに関して、恥と困惑が生じるようになる。つまり、困惑は「提示された自我がもうひとつの自我とどこかで衝突するときに生じる」(Goffman, 1967: 訳107)ようになる。このような困惑を克服する戦術が印象操作であり、困惑の発生を回避することである。そこにおいて、何事もなかったかのように平静を装い、冷静に対処し、泰然自若として振る舞い、相手もまたそれに協力することがなされるようになる。

このように、ゴフマンは困惑・恥を社会との関係において具体的に考察した。行為者が会話の脈絡において、自分自身が含まれることが自由であるべきときに、相互作用の参加者として自分自身に注意を払うと自己意識が生じる。つまり、自己意識と困惑は関連している。したがって、ゴフマンにおいて困惑の解明は自己意識的感情の研究であるということが出来る。

T・J・シェフは、このような困惑を中心とするゴフマンの恥研究を高く評価し、それは恥の概念を拡大し、恥を正面から問題としたものとしている(Scheff, 2006)。自我が社会的であるから、恥が生じるのであり、恥は個人主義的、非社会的は枠組では理解できない。恥は自分が他者の目によって否定的に評価されていることを認識し、それを自己意識することから生じる。恥は社会的、心理的な現象であり、いかなる他者、どういう自己意識、そして、どのような感情が生まれるのかを明らかにする必要がある(Scheff, 2003: 241)。

ここから、シェフはR・ベネディクトの恥の枠組を批判する。ベネディクトにおいて、伝統社会では恥が支配的な文化パターンであったが、近代社会では罪が支配的な文化パターンとなり、恥は罪に取って代わられるべきであると主張されている(Benedict, 1934)。しかし、ベネディクトの場合、恥を西洋近代社会の枠内で考えており、個人主義的、非社会的バイアスにとらわれている(Scheff, 2003: 241)。

西洋近代社会では恥は不名誉、不面目なこととされ、ネガティブな意味合いにおいて規定され、性の問題と同様に、タブー化され、人びとの意識の外へ置かれる

ようになった。しかし、恥は、N・エリアスが指摘するように (Elias, 1978)、消え去ることはなく、潜在化した。そして、こんにち、「恥は普通はあまり見えないけれども、最もしばしば、たぶん最も重要な感情となっている」(Scheff, 1988: 397)。

シェフによると、ゴフマンは恥を不名誉なものとして狭く規定せず、広く捉え、それを正面から問題としている。ゴフマンによれば、現代社会では困惑は普通の社会生活の普通の部分である。ゴフマンはノーマルな社会生活のノーマルな事柄を問題とした。かれは困惑や恥などの感情の社会的展開を考察し、その他者関連性を問題とし、困惑と困惑回避行動である印象操作を取り上げ、感情に対する自我の投入を明らかにした。²⁾

けれどもまた、ゴフマンにおいては、感情の外的表現は問題とされているが、感情の内的過程については明らかにされていない。A・ホックシールドによれば、ゴフマンは行為者の内部を見なかったもので、内面的感情に関心が向けられなかったものであり、「ゴフマンの行為者は外的な印象の操作に積極的であるが、内的感情の操作には積極的ではない」(Hochschild, 1983: 訳142) 存在となっている。

そして、ゴフマンの研究では「深層演技についての経験的な記述はなく、これに伴って深層演技に関する理論的な言説も弱い」(Hochschild, 1983: 訳245-6) もとなっている。ゴフマンの問題は感情表現のあり方であって、感情そのものの変容については直接的に取り扱っておらず、人びとが感情を感情ルールにしたがってコントロールするという自己操作的感情論の域を出していない。そこでは、多くの人間が感情ルールを変容させ、新たな自己感情を形成することが明らかにされていない。

ゴフマンの描く人間像は受け身の人間のイメージとなっており、そこには主体的自我が存在しない。ゴフマンにおいては人間が他者による印象を提示するために感情表現を行うが、しかし、その感情形成はきわめて受け身的なものとなっている。

ゴフマンの理論では、「感情に働きかける能力は特定の状況からのみ引き出されるのであって、その個人から引き出されるのではない。自己は、外見上の印象を他者に提示するために、感情を表現することを選択するかもしれない。しかし、それが感情操作という個人的な行為となると、ほとんど受動的になる。……感情は、身体的自己という受動的な媒体を通して相互行為に貢献する」(Hochschild, 1983: 訳247) ものとなる。

ホックシールドによれば、これまでの理論が見落としてきたものは「主観的経験としての感情概念と、社会的要因がどのように感情に侵入するかに関するより微妙かつ複雑な視点」(Hochschild, 1983, 訳236) である。感情は主観的であるとともに、社会的に形成され、また社会的に表現されるものである。

ホックシールドによると、感情の社会的形成においては「感情ルール」が存在している。「感情ルール」

とは「人びとの感情表現に関して、『そうすべきである』とか、『そうしなければならない』という『規則』や『基準』」(Hochschild, 1979: 563) を指している。感情は「感情ルール」にしたがって社会的に表現される。たとえば、パーティでは楽しさの感情、葬式では悲しみの感情、結婚式では幸せの感情が表現されるべきある (Hochschild, 1979: 551)。また、男性は悲しみの感情を抑制すべきであり、女性は喜びの感情を慎み深く表現すべきである。そこにおいて「感情ルール」が存在し、それにもとづいて感情が具体的に表現される。自分の感情がそうではなくても、そう表現しなければならず、そうしないと非難や輦轡、攻撃また回避がなされるようになってしまう。

人びとにおいて、感情の表現はストレートになされるというよりも、一般に、感情の程度あるいは質を変えようとする行為である「感情ワーク」(emotion work) がなされている (Hochschild, 1979: 562)。そして、自分の感情が「感情ルール」にうまく合わないときには、「感情操作」(emotion management) が行なわれる (Hochschild, 1983)。「感情操作」とは感情を操作しようとする行為であり、自分の感情が「感情ルール」からずれた場合に、それをカバーするものとして行なわれる。「顔で笑って、心で泣いて」というように、顔の表情で笑いを演じたり、悲しいと思わないときでも悲しさを装うのが「感情操作」である。

このような「感情操作」は自然的な「感情ワーク」というよりも、戦略的な「感情ワーク」となっている。「感情操作」は「感情ルール」に合うように自分の感情を操作することであり、それは「印象操作」の感情編に当たっている。そして、「印象操作」が外的な印象の操作であるのに対して、「感情操作」は感情表現だけではなく、感情自体を操作するものとなっている。「印象操作」は表層操作であるが、「感情操作」は深層操作である。

こんにち、産業労働のサービス化によって、「感情操作」が人びとの仕事に必要な「感情労働」(emotional labor) となっている。ホックシールドによれば、「感情労働」には女性の2分の1が従事しており、そこでは感情それ自体に商品価値がある「感情の商品化」(commodification of emotion) が進んでいる (Hochschild, 1983)。「感情労働」は、こんにち、フライト・アテンダント、看護師や警察官、福祉関係やサービス産業の従事者などの仕事に当てはまる事柄となっている。フライト・アテンダントにおいては笑顔の感情表現に加えて、怒りそのものを感じない深層操作がなされている。看護師においては罪悪感や恐れなどについて「感情操作」が行われ、警察官においては悲惨な出来事に関して「感情操作」がなされている (Smith, 1992, Pogrebin and Poole, 1995)。また、ファストフードの店員はマニュアルにしたがった「感情操作」がなされている (Ritzer, 1993)。

けれども、このような「感情操作」は「本当の感情」とは異なる感情、つまり「うその感情」を他のひとに

見せることにもなる。そのことによって、楽しくても心から笑えなくなるとか、悲しくても自然に涙することができなくなるなど、人びとの感情が疎外され、自己喪失が生じ、非人間化されるおそれがある。

しかも、このようなことが、こんにち、企業組織の内部のみならず、家族や友人などの親しい間柄においても行われている。相手にあわせて楽しさやうれしさを演じたり、喜びの感情を抑えたりする「感情操作」がなされている。そこにおいて「うその感情」が表現され、それによって、感情の疎外現象が拡大されることにもなっている。

このような危険を避けるためにも、ひとは自己の感情を自己内省的に作り上げる必要がある。人間の感情は自動的なものではなく、自己内省的に形成されるものである。そのことによって、人びとによる主体的な感情の変容が行われることになる。

IV. 自己内省的感情論の展開

自己感情論は感情の社会的形成を明らかにするだけでなく、感情の主体的形成をも問題とすべきである。そこにおいて積極的、主体的人間の感情のあり方を明らかにすることが必要となる。そうしない場合は、受け身の人間の像が形づくられてしまう。人間の感情は刺激に対する単なる反応として生じるのではなく、自らの規定づけや解釈にもとづいて形成される。人間は他者とのかわりにおいて自己を振り返ることを通じて、感情を自ら主体的に形成することができる。そこに生み出される感情は自己内省的感情である。感情は「自分自身との相互作用」(self interaction)を通じて形成されるものとなる。

デンジンによると、ホックシールドは感情の定義において「自分自身との相互作用」を無視している。人間の行動はそれ自体が感情なのではなく、「自分自身との相互作用」に持ち込み、意味づけ、解釈した場合のみ感情となり、そこにおいて感情が自己感情として定義されることになる (Denzin, 1983)。そして、ブルマーにしたがえば、人間の「シンボリックな相互作用のレベルでは、感情の意義は生理学的構成にはなく、行為者がいかに自分の感情を自分自身に表示し、それをどのように処理するのかということにある」(cf. Morrione and Farberman, 1981: 121)。したがって、それは単なる感情としてではなく、自己意識的な感情としてとらえられることになる。

人間において「意味のあるシンボル」(significant symbol)を通じてのコミュニケーションによって、他者との社会的相互作用とともに、「自分自身との相互作用」が行われるようになる。「自分自身との相互作用」において、他者の期待が背景から解放され、新しい意味が付与される「表示」がなされ、「表示」された期待が自己の置かれた位置や行為の方向に照らして「解釈」が行われるようになる (Blumer, 1969)。

そして、「解釈」において他者の期待が修正、変更、

再構成され、そこから、自己の感情が主体的に形成されるようになる。他者の観点を通じて自己を内省し、新たなものを創出する「創発的内省」によって、既存の感情が再構成され、新たな感情を生み出すことが可能とされる。³⁾

M・ローゼンバーグによると、「人間は動物と異なり、内省的動物である」(Rosenberg, 1990: 11)。内省とは自己を内省の対象とすることであり、それは他者の役割を取得し、他者の観点から自分自身を見る社会的過程に根拠をおいている。そして、「この過程の結果、有機体は自我の意識を発達させ、それによって人間は自分の知者であるとともに被知者にもなる」(Rosenberg, 1990: 3)。また、M・S・アーチャーによれば、「行為者は内省の力によって自らの環境を自分自身の関心との関連において検討する」(Archer, 2003: 133)ようになる。内省は「われわれ行為者が構造的、文化的特性を選択的に媒介し、その変容に創造的に貢献する過程にかかわっている」(Archer, 2003: 38)。

A・ギデンズやU・ベックによると、「リスク社会」は内省によって再構成される⁴⁾。「リスク社会」では生態系の荒廃や惨禍、核戦争や大規模戦争、経済成長メカニズムの破綻、全体主義的権力の増大という「リスク」が地域的範囲を広げ、地球規模に拡大するとともに、貧しき者も富める者も「リスク」を平等に経験するようになっていく (Beck, 1986: 1, 訳1-2)。

そして、ギデンズによれば、2つのレベルの内省が存在する (Giddens, 1990: 36)。ひとつはすべての人間に特徴的な、行為の一般的な内省的モニタリングであり、それは自分が行うことを内省する能力であり、それ自体が自我意識のベースとなっている。もうひとつは、近代社会の内省である。社会の近代化が進めば進むほど、内省がなされるようになり、人びとは「自らの存在の社会的条件を内省し、その条件を変える能力を獲得していくようになる」(Beck, 1996, 訳318)。社会は自らをリスク社会として把握し、内省し、「社会的行為が、その行為に関する新しい情報に照らして常に検討され、改善され、その特性を構成的に変えていく」(Giddens, 1990: 38)ようになる。そこに「内省的近代化」(reflexive modernization)が進行することになる。

M・アダムズによると、これまでの内省の概念は「それ自体に意識を向ける個人主体の行為」として論理的で、自立的で、主人公的なものとなっており、感情的、無意識的、非合理的、関係的、曖昧なダイナミックスを無視している (Adams, 2007)。また、N・ムゼリスによると、ギデンズの内省の概念は狭く、特殊西洋的となっており、それは活動過剰的であり、目的、道具的側面が強調されており、認知中心の合理的思考となっている (Mouzelis, 1999: 95)。ムゼリスはギデンズの内省の概念を「カタファティック」(cataphatic)と呼び、自らの内省の概念を「アポファティック」(apophatic)と呼んでいる。「アポファティ

ック」とは合理的思考を最小化し、宗教的な内省を考え、非活動的、非道具的、非合理的でオーセンティックなものである。

他方、ローゼンバーグによると、人間には2つのタイプの内省がある。ひとつは、自分自身の認知（記憶、知覚、注意、評価、抽象的推論、分析、統合）の対象となることであり、それは「内省的認知」といえる。もうひとつは、行為主体の内省であり、それは行為者が意図的効果を生み出す目的で、自分自身に働き返す過程であり、結果を生み出す積極的、効果的原因という経験を指している（Rosenberg, 1990）。

そして、内省過程は人間の感情の重要な側面に入り込み、「感情の性質をラディカルに変容する」（Rosenberg, 1990 : 3）ようになる。内省過程は3つの仕方でも感情にかかわっている。第1は、感情のアイデンティフィケーションに関してであり、それは解釈過程において示される。これはタンゲニー、ルイス、トレイシーらを取り扱った自己意識の感情に当たる。第2は、感情の表現に関してである。感情表現は外的、社会的相互作用的なものであり、感情表現の自己規制が含まれている。これはゴフマンが明らかにした自己操作的感情に当たる。

第3は、意図された感情経験をもたらすことにかかわっている。内省はそれ自体、感情の内的状態の創造を行い、生理学的な自動的感情を望ましい方向に意図的に変容することができる。内省は感情において行われ、感情の内省によって新たな感情が創出される。感情の内省化は感情を感情することであり、それはいわば感情洞察（emotional insight）であり、感情知（emotional intelligence）であることになる。

デンジンによると、「自分自身との相互作用」と「生ける身体」（lived body）が相互に結び付くと、そこに「生ける感情」（lived feeling）が生み出される。「生ける感情」には感覚の感情、「生ける身体」の感覚、意図的な価値感情、「自我の感情」がある。「自我の感情」は感情の感情であり、感情を伴う感覚である（Denzin, 1983）。それは内省的、自己意識の感情であり、「自分自身との相互作用」が行われる感情である。

「自分自身との相互作用」において、既存の感情が表示され、解釈され、そこから新しい感情が創発されてくるようになる。そこにおいて、感情の主體的形成がなされることになる。それは感情表現の変容のみならず、感情そのものの変容も含んでいる。

感情は「自分自身との相互作用」という内省過程とのかかわりにおいて、その変容がなされる。人間において、知的要因と感情的要因とは全くの別物ではなく、相互に影響し合い、結びつき、新たなものを生み出していく。感情の変容には、認知（解釈）の変容、評価の変容、感情ルールの変容、表現（ルール）の変容、経験（ルール）の変容などがある。そこにおいて、感情に関して、既存の枠を超えて新たな行為が展開する「役割形成」（role making）（R・H・ターナー）

（Turner, 1962）がなされるようになる。

このような「内省」による「リスク」の乗り越えは、新しい合理性の道を生み出すことによって成し遂げられるようになる。新しい合理性は人間同士のヨコのつながりを表す合理性であり、それは他者に目を向けた感情であるとともに、自己に向けられた感情として現れる。新しい合理性はローカルな合理性を認めるものでもあり、しかも、それは固定した堅い合理性ではなく、状況に対して柔軟に変化する「やわらかい合理性」でもある。このような「やわらかい合理性」にもとづいて、新たな社会の形成がなされるようになる。

注

- 1) H・ガースとC・W・ミルズによれば、「ジョージ・ミードは感情と動機について適切な概念を持たなかったし、人間の感情生活に関するダイナミックな理論を持っていなかった」（Gerth and Mills, 1953）のである。
- 2) シェフ自身も恥を最も社会的感情として、恥を社会的紐帯に対する脅威であると規定し、その意味でも恥は最も社会的な感情であるとしている。
- 3) ミードは「内省的思考」について明らかにしている。「内省的思考」とは問題を解決する人間の能力を表わす。「内省的思考」は「問題的状况」（problematic situation）において出現する。「問題的状况」において人間行為を停止し、「遅延反応」（delayed response）を示す。その「遅延」のあいだに「内省的思考」を活性化する。「問題的状况」をイメージに描き、問題点を明らかにし、問題解決の新しい方策を作り出す。
人間は「問題的状况」において、思考による問題解決を試み、新たなものの創発を行う。新たなものが自己を「内省」することから生み出されてくるという意味で、このことを「創発的内省」（emergent reflexivity）と呼ぶことができる。「創発的内省」とは他者の態度を通じて客観的に自分の内側を振り返り、過去および未来と関連づけながら、新たな世界を創出することを表わす。「創発的内省」によって、自己が新しく生まれ変わると同時に、他者も変わるようになる。
- 4) reflexiveは「再帰的」という訳語が多く当てられているが、内容的には、それは自分を振り返ること、つまり「内省」することを意味する。従って、reflexive modernizationは「再帰的近代化」よりも「(自己)内省的近代化」がよいと思われる。

参考文献

- Adams, M., 2007, *Self and Social Change*, Sage Publications.
- Archer, M. S., 2003, *Structure, Agency and the Internal Conversation*, Cambridge University Press.
- Beck, U., 1986, *Risikogesellschaft*, Suhrkamp Verlag. 東廉・伊藤美登里訳『危険社会』法政大学出版局、1998。
- Beck, U., Giddens, A. and S. Lash, 1994, *Reflexive Modernization*, Polity. 松尾精文ほか訳『再帰的近代化』而立書房、1997。
- Benedict, R., 1934, *Patterns of Culture*, Houghton Mifflin. 米山俊直訳『文化の型』世界思想社、1973。

- Blumer, H., 1969, *Symbolic Interactionism*, Prentice-Hall. 後藤将之訳『シンボリック相互作用論』勁草書房。
- Campos, J., 2007, Foreword, Tracy, J. L., R. W. Robins and J. P. Tangney(eds.), *The Self-Conscious Emotions*, The Guilford Press, pp.ix-xii.
- Cooley, C. H., 1902, *Human Nature and the Social Order*, Charles Scribner's Sons.
- Denzin, N. K., 1983, A Note on Emotionality, Self and Interaction, *American Journal of Sociology*, 89 : 42-49.
- Denzin, N. K., 1985, Emotion as Lived Experience, *Symbolic Interaction*, 8(2) : 223-240.
- Elias, N., 1978, *The Civilizationizing Process*, Blackwell. 赤井隼爾ほか訳『文明化の過程』上、下、法政大学出版局、1977-78。
- Evans, D., 2001, *Emotion*, Oxford University Press. 遠藤利彦訳『感情』岩波書店、2005。
- Franks, D. D., 2003, Emotions, in Leynolds, L. T. and N. J. Herman-Kinney(eds.), *Handbook of Symbolic Interactionism*, Altamira Press. pp.787-809.
- Franks, D. D. and V. Gecas, 1992, Autonomy and Conformity in Cooley's Theory, *Symbolic Interaction*, 15(1), 49-68.
- Giddens, A., 1991, *Modernity and Self-Identity*, Polity Press. 秋吉美都ほか訳『モダニティと自己アイデンティティ』ハーベスト社、2005。
- Giddens, A., 1994, Living in Post-Traditional Society, in Beck, U., A. Giddens and S. Lash, *Reflexive Modernization*, Polity, pp.56-109. 松尾精文ほか訳「ポスト伝統社会に生きること」『再帰の近代化』而立書房、1997、105-204頁。
- Goffman, E., 1956, Embarrassment and Social Organization, *American Journal of Sociology*, 62 : 264-274.
- Goffman, E., 1959, *The Presentation of Self in Everyday Life*, Doubleday Anchor. 石黒 毅訳『行為と演技』誠信書房、1974.
- Goffman, E., 1967, *Interaction Ritual*, Double Day. 浅野敏夫訳『儀礼としての相互行為』法政大学出版局、2002。
- Hochschild, A. R., 1979, Emotion Work, Feeling Rules and Social Structure, *American Journal of Sociology*, 85 : 551-575.
- Hochschild, A. R., 1983, *The Managed Heart*, University of California Press. 石川 准・室伏亜紀訳『管理される心』世界思想社、2000。
- Jacobs, G., 2006, *Charles Horton Cooley*, University of Massachusetts Press.
- Leary, M. R., 2004, The Self We Know and the Self We Show: Self-Esteem, Self-Presentation, and the Maintenance of Interpersonal Relationships, in Brewer, M. B. and M. Hewstone (eds.), *Emotion and Motivation*, Blackwell, pp.204-224.
- Leary, M. R., 2007, How the Self became involved in Affective Experience, Tracy, J. L., R. W. Robins and T. P. Tangney (eds.), *The Self-Conscious Emotions*, The Guilford Press, pp.38-52.
- Lewis, M., 2000, Self-Conscious Emotions: Embarrassment, Pride, Shame, and Guilt, Lewis, M. and J. M. Haviland-Jones(eds.), *Handbook of Emotions*, 2nd edition, The Guilford Press, pp.623-636.
- Lewis, M., 2007a, Self-Conscious Emotional Development, Tracy, J. L., R. W. Robins and J. P. Tangney (eds.), *The Self-Conscious Emotions*, The Guilford Press, pp.134-149.
- Lewis, M., 2007b, The Emergence of Human Emotions, Tracy, J. L., R. W. Robins and J. P. Tangney (eds.), *The Self-Conscious Emotions*, The Guilford Press, pp.265-280.
- Mead, G. H., 1930, Cooley's Contribution to American Social Thought, *American Journal of Sociology*, 35 : 693-706.
- Mead, G. H., 1934, *Mind, Self and Society*, (Morris, C. W. ed.) The University of Chicago Press. 稲葉三千男ほか訳『精神・自我・社会』青木書店、1973。
- Mills, T. and S. Kleinman, 1988, Emotion, Reflexivity and Action, *Social Forces*, 66 : 1009-1027.
- Morrione, T. J. and H. A. Farberman, 1981, Conversation with Herbert Blumer, *Symbolic Interaction*, 4(2) : 113-128.
- Mouzelis, N., 1999, Exploring Post-Traditional Orders, O'Brien, M., S. Penna and C. Hay(eds.), *Theorising Modernity*, Longman, pp.83-97.
- Pogrebin, M. R. and E. E. Poole, 1995, Emotion Management, in Franks, D. D. (ed.), *Social Perspectives on Emotion*, 3 : 149-168.
- Robins, R. W., E. E. Nofle and J. L. Tracy, Assessing Self-Conscious Emotions, Tracy, J. L., R. W. Robins and J. P. Tangney (eds.), *The Self-Conscious Emotions*, The Guilford Press, pp.443-467.
- Rosenberg, M., 1990, Reflexivity and Emotion, *Social Psychology Quarterly*, 53(1) : 3-12.
- Rosenberg, M., 1991, Self-processes and Emotional Experiences, Howard, J. A. and P. L. Callers(eds.), *The Self-Society Dynamic*, Cambridge University Press, pp.123-142.
- Ritzer, G., 1993, *The McDonaldization of Society*, Pine Forge Press. 正岡寛司監訳『マクドナルド化する社会』早稲田大学出版部、1999。
- Scheff, T. J., 1988, Shame and Conformity, *American Sociological Review*, 53 : 395-406.
- Scheff, T. J., 2003, Shame in Self and Society, *Symbolic Interaction*, 26(2) : 239-262.
- Scheff, T. J., 2005, Looking Glass Self: Goffman as a Symbolic Interactionist, *Symbolic Interaction*, 28(2) : 147-166.
- Scheff, T. J., 2006, *Goffman Unbound*, Paradigm Publishers.
- Schubert, H., (ed.), 1998, *On Self and Social Organization*, The University of Chicago Press.
- Shott, S., 1979, Emotion and Social Life, *American Journal of Sociology*, 84 : 1317-1334.
- Smith, P., 1992, *The Emotional Labour of Nursing*, Macmillan Press. 武井麻子ほか監訳『感情労働としての看護』ゆるみ出版、2000。
- Tangney, J. P. and R. L. Dearing, 2002, *Shame and Guilt*, The Guilford Press.
- Tangney, J. P., J. Stuewig and D. J. Mashek, 2007, What's Moral about the Self-Conscious Emotions?, Tracy, J. L., R. W. Robins and J. P. Tangney (eds.), *The Self-Conscious Emotions*, The Guilford Press, pp.21-37.
- Tracy, J. L. and R. W. Robins, 2007a, The Self in Self-Conscious Emotions, in Tracy, J. L., R. W. Robins and

- J. P. Tangney (eds.), *The Self-Conscious Emotions*, The Guilford Press, pp.3-20.
- Tracy, J. L. and R. W. Robins, 2007b, Self-Conscious Emotions: Where Self and Emotion Meet, Sedikides, C. and S. J. Spencer (eds.), *The Self*, Psychology Press, pp.187-209.
- Turner, R. H., 1962, Role Taking, in Rose, A. (ed.), *Human Behavior and Social Processes*, Houghton-Mifflin, pp.20-40.

(2008年11月4日受理)